子どもの「困った行動」への対処
事　例　集

～子ども自身が行動を変えようとする働きかけって
どうしたらいいの？～

〈はじめに〉

子どもたち、とりわけ発達上の課題のある子どもたちは、しばしば教師や親を困惑させるような「困った行動」を起こします。

そんなとき、「頭ごなしに叱りつけてはいけない」ということは百も承知でありながら、対処の方法が分からず、結局どなりつけたり、罰を与えたりして、強制的な対応をしてしまいます。

その結果、ますます子どもは外れた行動を強化させてしまうという悪循環に陥ります。

どんな働きかけをしたら、子ども自身が自分の間違った行動を改善しようとしたり、感情を自己コントロールする力を育てられるのでしょうか？

これまで、いろんな研修会や事例検討の場で私が学んだことをまとめてみました。

先生方の指導のヒントになれば幸いです。

2013.11.14

子ども支援センター
上野　芳樹

【事例】

A 君が、 自分の席で板書をノートに書いていました。その横を B 君が通り過ぎるとき、机の角に引っかかって、A 君の筆箱が落ちてしまいました。カッとなった A 君は B 君を押し倒し、けがをさせてしまいました。
「何てことをしたんだ！」と先生に叱られた A 君は「B が悪いのに！」とくやしくて泣きました。

起きてしまったことはしかたがないですが、A 君の次からの行動を変えるために、どんな指導をすればいいでしょうか？

■「で・か・こ・けモデル」

阪大の藤岡先生が「でかこけモデル」を提唱しておられます。
物事の流れを（で）「できごと」、（か）「考え・感情」、（こ）「行動」、（け）「結果」に整理してみて、どこで認知のゆがみが生じているかをみるというものです。
この事例で言えば、人が通ったとき自分の机に当たった。「わざとやったな。」と考えて殴りかかって、先生に叱られて泣く。どこで詰まっているかといえば「考え」でつまずいています。そこを手当するのです。

T　君は、B 君がいやがらせをしようとしたと考えたんだね。違う考え方はないかな？
A　たまたま当たったのかな、と考えることもできる。
T　たまたま、だったらどうなる？
A　しょうがないかな。
T　そうすると？
A　当たったで、と言うだけでいいかもしれない。
T　で、どうする？
A　ごめんって謝ってもらう。
T　じゃ、こんどはそういうふうにしてみたら？

こんなふうに別の流れを示します。
被虐待児や発達障害児の多くは「考え」でつまずいています。「わざとやってきた」「俺のことが嫌いで嫌がらせをしてきた」というような被害的認知がすごく多いのです。

【事例】

特別支援学級のＲ君（２年）。すぐカッとなるなど、情緒面の課題が顕著な子です。

体育館で学年発表の練習をしている場面。

みんなの中に入りづらく、したくないので、ふらっと体育館を出てしまいました。

担任のＫ先生は、Ｒ君に厳しく注意したらパニックになることが分かっています。無理強いはできないと思ったＫ先生はＲ君に「〇〇△△……」といいました。

それを聞いたＲ君はしばらく考えて、自分から体育館にもどりました。

さて、Ｋ先生は、Ｒ君にどんなことを言ったのでしょうか？

■「〇〇するか、△△するか、どっちにする？」

Ｋ先生は、Ｒ君にこんなふうに言われたそうです。

「したくなかったらしなくてもいいよ。でも、他の友達に影響してくるから、本番には出られないよ。
でも、本番のとき、自分ひとりぽつんと観客席で見ているよりみんなと一緒に出たかったら、今練習しておかないといけないよ。
どっちにする？」

すると、しばらく考えていたＲ君は、「出たいし、練習する。」と言ってすっと入っていったそうです。

「時間内にできないグループは休み時間にしなさい。」と担任が言われ、できていなかったＲ君のグループが、いつするかという相談をしている時にも、Ｒ君はふらっと廊下に出て行ってしまいました。

そのときもＫ先生は、

「今、話し合いの中に入らないということは、他の子が決めた通りにしなければならないよ。今日の昼休みにすると言ったら、必ず入らないといけない。君は明日したいと思うなら、話し合いに入って言わないといけないよ。」

と言ったら、Ｒ君は話し合いに入っていって自分の意見を言い、次の日に決まったそうです。

【事例】

自閉的傾向のある１歳半のＦ君。
保育園のお昼寝の時間。
みんなが昼寝をしているのに、一人だけうろついて寝ようとする子を起こしてしまいます。

さて、こんな時、Ｆ君の困った行動をやめさせるにはどうしたらいいでしょう？
前頁の事例をヒントに考えてみてください。

Ｆ君の担当をしているＧ先生はつぎのように言われました。

「ここはお昼寝の部屋なので、起きていたいのなら隣の部屋へいってくれる？ここにいたいのなら寝ましょうね。」

Ｇ先生にこう言われて、Ｆ君の目がくるくる動きました。（ああ、考えてる、考えてる！）とＧ先生は思われたそうです。
Ｆ君は、ここにいることを選んだようで、そのうちおとなしくなって寝てしまったそうです。1 歳半ぐらいの子でもこうした判断ができるのですね。

叱って矯正させようとするのではなく、このように、自分で方法を選択させるというやり方は、確実に自立の力を育てます。

★注意
「～なら～する？」という言葉かけの奥に相手を責める意識があると、全く逆効果になります。
「静かにできないなら、出て行って」という言葉の裏に指導者の怒りがある場合、それを子どもは敏感に察知します。「ああ、出て行ってやる！」と反発心を引き出してしまいます。

【事例】

幼稚園の朝の会の場面。

みんな、イスに座って担任の先生の話を聞いているのに、M君はじっとできず、ふらふらとうろついてしまいます。「座りなさい。」と副担任のＢ先生が追いかけて注意すると、ますますＴ君は走り回り、教室がざわついてしまいました。

こんな時、どんなふうに対応したらいいでしょうか？

■良いモデルを見て学ばせる

「朝の会はきちんと座って先生の話を聞く」ということはどの子にも身につけさせたい当然のルールです。

でも、発達障害の子はそうしたルール枠の認識があいまいなことが多いのです。そういう子に「座りなさい」と追いかけ回したところで、そうしなければいけないという意識が本人にありませんから聞けません。無理やり座らせてもすぐ動き出します。いつも横について見張っていなければならなくなります。

力づくではなく、本人の主体を起こし、自分から行動を変えようとするような働きかけが必要です。

この事例の場合、次のような言葉かけをしてみてはどうでしょうか。

Ｔ　M君、今、何の時間だっけ？
M　朝の会の時間
Ｔ　そうだね。今、みんなは何してる？
M　座ってる
Ｔ　じゃ、座ろうか

こんなふうに、良いモデルを見させて、M君自身に判断させるのです。
守るべきルールの枠は崩さずに、見させて、主体を起こしていく。
はみ出す子の主体を起こす言葉かけが必要です。

【事例】

母子家庭で育ったＡ君（小３）。幼少期、母は昼夜仕事で、子育てを祖母に頼むことが多く、Ａ君が言うことを聞かないと手も出ていたそうです。同居の祖父も昔気質でＡ君のしつけにはとても厳しいそうです。

Ａ君は、２年生の後半から学校での乱暴な行動が増えました。字が読めなくていらいらすると、すぐ物を投げたりします。「自分だけを見てほしい」という思いも強く、担任にべったり甘えてきたりもします。

担任の先生はＡ君がクールダウンできるスペースを作ったり、放課後、Ａ君と個別の予習の時間を設けるなどして、Ａ君の思いを受け止めながら対応しています。

今、お母さんと担任とは、心を開いて話し合える関係にあるそうです。Ａ君の学校での姿が変化してきたことをても心配しておられるお母さんに、家でのＡ君への関わりについてどんな助言をするといいでしょうか？

■「『肯定』の言葉から入りましょう。」

Ａ君にはいろんな家庭の事情があってのことでしょうが、幼少期に「一対一の関係性」が不十分だったのではないでしょうか。人は一対一の関係づくりができて、初めて一対多の関係づくりに進ことができます。

お母さんがＡ君としっかり向き合おうとされている今は、もう一度一対一の関係をしっかり再構築構築するチャンスです。

「ぎゅっとだっこ」というスキンシップもいいけれど、むしろ、「この子の心に沿う」ということをこのお母さんができたらずいぶん変わっていくのではないかという気がします。生まれて８ヶ月で子どもの感情が育つことを考えると、もっと母がこの子を肯定的に受け止めているという経験を重ねた方がいいのです。

ともかく、言葉を『肯定』から入りましょう。

「ただいま」→「大きい声で気持ちいいな。」「元気だね。」

「けんかしたんや」→「そうか、喧嘩したかったんやね。」

というふうに、その子のそのときの気持ちに添っていく。「まず認める言葉から入って、絶対批難しない。」それが一対一の関係作りの基本です。

お母さんにたくさん要求してもできないから、「肯定から入る」という一点豪華主義でやってもらうのがいいでしょう。

「肯定から入る」ということは学校の教師も意識するといいと思います。

【事例】

深く考えることが苦手で、衝動的な動きが多い５年生のＨ君。
教室では使わないという約束になっているドッジボールを投げて窓ガラスを割ってしまいました。

さて、ガラスを割ってしまったＨ君にどんな指導をするといいでしょうか？

■自分で責任を取らせる

①後始末

まず、他の子にケガが起きないよう、迅速に破損したガラスの処理をしなければなりませんね。

「Ｈ君、 まず１番目にしなければならないことは何？」

と尋ねれば、「割れたガラスを始末すること。」ぐらいは言えるでしょう。教師が後始末するのではなく、割った張本人のＨ君にやらせましょう。

②謝罪

後始末が済んだら、次にすることは「謝罪」です。ルール違反をしたことについて、学級のみんな、そして校長先生にもきちんと自分で謝罪させましょう。

③善後策を立てる

同じ失敗を二度と繰り返さないためにはどうするか、その具体策をきちんと立てさせましょう。「気をつける。」といった抽象的な言い方をしたら、「そうだね。どんな方法で？」と具体化させましょう。

④弁償

ガラス代を親に払ってもらったのでは責任を取ったことになりませんね。「自分のお小遣いで支払う」「家のお手伝いをしてお金を貯めて支払う。」など、保護者の了解も得て、金銭面での責任も取らせましょう。

失敗したとき、その責任をきちんと取らせるよう指導することで、自己コントロール力、規範意識が育ちます。

【事例】

Ｃ先生がある小学校を訪問しました。

廊下を歩いていると、一年生の子ども同士が殴る、蹴るのものすごいケンカをしている場面にばったり出くわしました。

まわりの子どもたちも、あまりのすごさに止めようもなく、見ていました。

こんな時、たいていの教師は「やめなさい！」と力づくで引き離しにかかるでしょう。

でもＣ先生はそうせず、ケンカしている二人に
「〇〇……」と言いました。
すると、それまで猛げんかしていた二人が、あっけなく、すっと力を抜いてしまったそうです。

さて、Ｃ先生は、どんな言葉を二人にかけたのでしょうか？

■反映的な聴き方

（相手の気持ちに添った言葉を返す）

興奮している二人を「やめなさい」と強引に引き離したところで、そう簡単には収まらないだうと思ったＣ先生は、とっさにこう言ったそうです。

「あんたたち、よっぽどくやしいことがあったんやねえ。」

二人の子どもたは、Ｃ先生の一言で、「自分のくやしい気持ちを受け止めてもらえた。」という気持ちになったのですね。人は、「受け止めてもらえた。」と思えると怒りの感情もしずまっていくものなのです。

「ああ、そのことがくやしかったんだね。」「それがつらかったんだね。」と相手の気持ちに寄り添い共感的に聞くことは、子どもに限らず、大人同士の関係においても、とても有効です。

【事例】

４年生のＥ君。発達上の課題もあるのか、すぐ大きな声を出したり、些細なことを大げさに言ったりしてしまいます。

そのＥ君が学校からの帰り道にとなりのクラスのＳ君からカバンを持たさせたり、叩かれたりしていることが分かりました。

Ｅ君のお母さんから相談された担任のＦ先生は、Ｅ君とＳ君を呼んで事実を確認しました。Ｓ君は事実を認め、Ｅ君もきつい言葉を言ってしまったということでお互いに謝りました。

しかし、しばらくするとまたお母さんから電話があり、

「最初はよかったのですが、やはりまだいじめがなくなっていないようです。先生が指導してくださっても無くならないということは、うちの子に問題があるのでしょうか？」

とすごく悩んでおられる様子でした。

さて、このような場合、担任はどんな対応をするといいでしょうか？

■子育ての目標で一致し、E君の問題はE君自身に解決させる

お母さんから先生に話があり、その話を受けて先生が動く、このルートをいきなり行かないことです。これは、Ｅ君に起きた事件です。だから、先生に言いたいのならＥ君自身が言わなければならないのです。お母さんが言うのはＥ君からの話ですから自分に都合の悪いことは排除されている可能性も高いでしょう。お母さんの話にすぐ乗る前に

「Ｅ君自身が話しに来れますか？」

と問いかけてみる。Ｅ君の主体を起こすことが大切です。

お母さんと話すときの一番のポイントは、

「お母さんはＥ君がどういう子に育ってほしいとお考えですか？ 」

と尋ねること。「私は、自分の問題は自分で解決できる子にすることを目標にして指導していますが、お母さんはどうですか？」と。

ここで、Ｅ君が自立して力のある子になってほしいということがお母さんと一致できれば、Ｅ君への言葉かけも変えてもらえます。

「お母さんに相談してくれてありがとう。でも、先生にも相談してみたら？」

その上で、Ｅ君がＳ君と話し合いたいと言えば、「Ｓ君を呼ぼうか」ということになります。

自分に来る悪者はすべて誰かに言って解決してもらう、解決してくれなかったら、解決してくれなかった先生が悪いということになってしまったら、すごく仕事がやりにくいですね。

【事例】

極度の不安障害のＩ君。

３年生でW小学校に転入してきましたが、「担任の先生が怖い。」と言って不登校になってしまいました。

４年生になり、支援学級での個別指導に少し来られるようになりました。でも腫れ物にさわるような対応でした。

５年生になり、特別支援学級でなら過ごせそうだというので、支援学級のＡ先生が対応することになりました。

最初は休まず登校していましたが、半月ほどすると、

「Ａ先生はぼくの話を聞いてくれない。」

と登校してもすぐ帰ってしまったり、行き渋るようになりました。

何とか登校させたい保護者は

「Ａ先生ではだめだ。Ｉは、誰もいない部屋でなら勉強できるといっている。そういう環境を作ってほしい。」

と要望してきました。しかたなく、労務員室を空け、学習させることにしました。しかし、それも数日続いただけでした。すると今度は、

「支援学級のＢ先生の教室なら、同学年の子もいるので行けそうだとＩが言っている。そちらで対応をお願いしたい。」

と言ってきました。

４年生のとき、Ｉ君に関わっていたＢ先生は了解し、受け入れてくれました。

でも、Ｂ先生の教室で過ごすようになってしばらくすると、またＩ君はいろいろ不満を親にこぼし、遅刻・早退を繰り返すようになりました。

そんなＩ君が、やがて休まずに登校するようになりました。

Ｂ先生は、どんな指導をされたのでしょうか？

■枠を守る

Ｂ先生は、Ｉ君にこう言われたそうです。

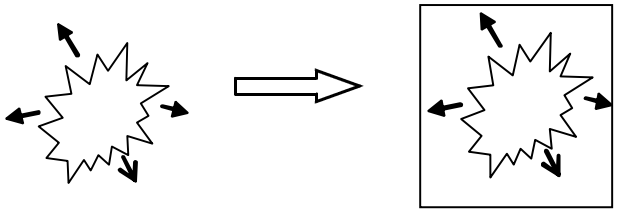
「学校は、どんなことがあっても来るところです。いったん登校したら、帰りの会までいなければならないのです。」

そして、その一線を守ることで一致した動きをしてほしいと保護者にも伝えました。

すると、不思議なことに、それ以降、Ｉ君は休まずに登校するようになりました。

おそらく、それまでのＩ君は、自分の中の不安を親や教師にぶつけ、その対処をしてもらうことで一時的にほっとしていただけだったのでしょう。でも、自分の中に新たな不安が出てくると、また持ちきれなくなり、いつまでたっても自分自身が定まらない状況にあったのではないかと思います。

それが、超えてはいけない枠をはっきり示すことで不安もそれ以上拡散しなくなったということではないでしょうか。



【事例】

不注意傾向のあるＤ君。持ち物をよく忘れます。教科書、ピアニカ、体操服など一日一つか二つは必ず忘れてきます。特におはしを毎日持ってきません。

お母さんに話しても

「あの子、持って行かないんですよ。」

と無関心な答が帰ってくるだけ。

「明日は持ってきなさいよ！」

と叱るように言っても、またわすれてきます。

そんなＤ君に担任の先生はどんな対応をすればいいのでしょうか？

■Ｄ君自身に対処法を考えさせる

Ｄ君の場合、「おはしを忘れた」ことが自分にとって切実な問題ではないのですね。給食を食べるときになってようやく「あ、箸が無いと食べられない。箸がほしい」と意識する、という感じでしょうか。

Ｄ君が「お箸、忘れてきた。貸して。」と言ってきたとき、

「先生も貸してあげたいけど、毎日だと先生も困るんだ。あなたも困るし、先生も困る。さあどうしよう？」

「先生に借りる方法以外の方法を考えてみて」

と相手の意識を起こし、考えさせましょう。

例えば、木の枝を折ってくる、鉛筆で食べる、……。

要するに、もうちょっと自分で工夫できないかというところを考えさせる。

こういうやり方をしても、一年かかるかもしれません。でも、その子にとって自分の意思が形成されていくことは大事です。

あるお母さんの話です。

「うちの子も毎日忘れ物をしていました。担任の先生からも言われるので、親として一応「ちゃんとしてね。」とは言いつつ、なるべく手を出さないように思ってやっていたけれど、全然直らないので、もう放ったんです。そしたら、３年間毎日忘れ物をしていました。ところが４年生の担任の先生が家庭訪問の時、『あなたのお子さんはピカーです。全く忘れ物がありません。』と言われてびっくりしたんです。こういうやりかたもあるのかなと思います。その子今２９歳だけど、実に丁寧にやります。」

【事例】

６年生のＧ君。
３年生頃から教室での学習や集団活動に入りづらくなりました。学習から逃げ、５年の２学期末は成績がつけられない状態でした。
家では「６年になったらがんばる。」と言い、実際６年生になってからは、学習に参加できる場面も増えました。
しかし、学習の入り口で「これはしない。」と決めつけてしまうところがあり、体育や音楽はなかなか入れません。
音楽の時間、参加しようとしないＧ君に担任のＳ先生は
「どういう形でなら参加できる？」
と尋ねると
「非常階段から教室に入って、みんなの近くに居る。」
と言うので、じゃ、そうしようということになったのですが、途中で、
「やっぱり行かない。」と言い出しました。
「君が自分で決めたことだから、ちゃんとやろうよ。」
とＳ先生が粘り強く説得しているうちにＧ君は泣き出して、素手でガラスを割ってしまいました。

決して学習が理解できないわけではない、音楽は好きで、運動能力も低くないのに、どうしてこんなにかたくなにみんなとの学習を拒否するのだろうかと担任の先生は悩んでいます。
そんなＧ君にどう関わっていけばいいのでしょうか？

■Ｇ君の心に寄り添っていく対応を心がける

Ｇ君は能力もあり、がんばろうという気持ちも失っていません。休み時間、友達と一緒に遊べていて、まわりの子も一定Ｇ君の良さは認めています。
問題は、対「大人（親・教師）」との関係の中で起きています。
Ｇ君は「がんばってやろう」という気持ちと「できない」という劣等感の中で揺れています。そういうＧ君に対して「なぜ参加できないの？」と教師や親が問います。「なぜ？」「何がいやなの？」という問いかけは相手を責める言葉。Ｇ君にとっては、劣等感に加えて自分の領域を侵害されたことへの反発・怒りを引き起こしてしまう言葉になります。思春期になり、そのことには非常に敏感になっているでしょう。
おそらくＧ君は「大人は自分のことを分かってくれない」という寂しさを抱えているのではないでしょうか。そういうＧ君の心に寄り添っていける存在が必要です。
まわりの教師に対してＧ君が自分の本音を語れるようになるためには「なぜ？」でなく、「いま、君の心の中はどういう感じ？」と感情を受け止めることに徹することです。
「自分で決めたことはやりきろうよ。」という言葉も「君はきっとできると信じてるよ。」と言えばどうだったでしょうか。あるいは、
「きれいにやりきりたい気持ちと、やれない気持ちの両方があるんだね。きれいにやりきりたい気持ちの方に立つことは難しいかな？」など、どこまでもＧ君の心に寄り添っていく対応を心がけることが大切ではないでしょうか。

【事例】

１年教室へ補欠に入った時間のこと。漢字プリントをしている子どもたちを期間巡視をしている間に、M君とH君がけんかになってしまいました。M君は泣いて、自分のプリントをくしゃくしゃにしています。H君は更に挑発するようにM君の机に落書きします。「やめなさい」と止めても挑発をやめません。しかたなく、H君を強引に外に出し、となりの日本語教室に入れました。

私の関わった事例です。

この後、最終的にはH君とMは君は仲直りし、H君はが自分でM君の机の落書きを消しに行きました。

■図に書きながら話を聞く

「H君、とってもくやしかったようだけど、どうしてそうなったのか、聞かせてくれる？」と黒板のところへ連れて行き、
「これがH君の机、こっちがM君の机やで」
と書き始めると、それまで暴れていたH君が、話に応じ始めました。
「最初、何があったの？」
「M君が『死体になれ』て言ってきた。」
「それで、どうした？」
「『うっさい、死ね。』て言った。
「それから？」
「M君が『泣け！』て言ったから、M君のプリントに落書きした。」
「ああ、それで、M君が自分のプリントをくしゃくしゃにしたんやな。そうか、わかった。死体になれ、とか、泣け、て言われたんがくやしかったんやな。でも、プリントに落書きしたのは、今、どう思う？」
「あやまってほしい。二つともあやまってほしい。」
「そうか、そこはM君にあやまってほしいんやな。落書きをしたことについては、ごめんって言えるか？」
「……」
「M君呼んでくるでな。」
と言ってM君を連れてきて二人を座らせ
「M君、今H君から聞いたことを言うよ。もし違ってたら言ってね。」
と板書を見ながらH君の話を伝えるとM君も大筋それでいいとうなずいたので、
「じゃ、死体になれ、とか泣けとか言ったことについては謝れるか？」
「ごめんなさい。」とM君は素直に謝りました。
H君も「ごめんなさい、もう言わないでね。」
と言い、とりあえず和解しました。教室に戻ったH君はM君の机の落書きを自分で消していました。

〈終わりに〉

いかがですか？

ここにあげた事例のような場面は、学校生活の中でごく普通に見られます。そんな時、ここに示した対応より、もっといいやり方があるかもしれません。

「わたしがこんなふうに対応したら、子どもがこう変わった。」という具体的な事実をみんなで持ち寄り、事例検討を重ねていくことで、「子どもに添った働きかけ」の原則のようなものが見えてくるのではないかと思っています。

子どもの置かれている現状がどんどん厳しくなっていきます。「子どもが悪い」「親が悪い」と言ってみても何も変わりません。「教師が変わる」しかないのです。